

ぼくのかんがえたさいきょうの通貨 (は、あるのか)

Re-thinking and Overcoming the Payment Trilemma

株式会社マネーフォワード マネーフォワード総合研究所長 瀧 俊雄

日本の金融制度において Fintech の本格検討が始まってから十年余が経過した中、私たちの日常生活において、電子マネーは従来のカード型に留まらず、店舗でのコード決済や個人間送金の形でも広く普及した。

一方で、銀行口座を通じた決済は、昨今は個人間で無料で使える銀行間送金システムがあったり、店舗決済のソリューションも一通り存在するにもかかわらず、そこまで普及していない。仮にこれらが分散台帳技術の上で運用されたり、処理にかかわるコストが極限まで低くなった場合には、利用度が変わるのだろうか。

世界を見ると、ここ数年間はステーブルコインの急速な拡大がみられているのみならず、米国における制度的な後押し策が、同国の国債発行政策とも相まって打ち出されている。しかし一方で、ステーブルコインはこれまでの世界秩序からすれば決済手段として安定性への疑念が複数指摘されるだけでなく、付利も行われぬ。それでもなお、有力な決済手段とみられているのはなぜか。

そして、欧州を中心に導入議論が現実化した一般利用型 CBDC は、実際にどのような立ち位置を得るのだろうか。プライバシーやイノベーション、バンクランなどへの懸念解消はどのように行われるのか。

通貨の未来を見通す上で、まだ分からないことは多い。とはいえ、今日に至る決済や通貨のデジタルライゼーションの状況を分析する際に、複数のタイプのトリレンマが語られてきた。これらの諸前提が変わったり、そもそも決済の指示を人間ではなく人工知能が能動的に行うケースを見据えた際に、どのような変化がありうるのか。本報告では考慮すべき論点を整理しつつ、未来に向けた予見性を高めることができないかを考察してみたい。